

蒼鉛「ヂアスポラール」 Bismut-Diasporal ノ小實驗

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/30802 |

蒼鉛「ヂアスポラール」Bismut-Diasporalノ小實驗

金澤醫科大學皮膚科教室(主任土肥博士)

高 橋 幸 三

「ヂアスポラール」ハ蒼鉛製劑ノ一種ニシテ近時蒼鉛劑ガ新驅微藥トシテ偉効アリトセラレ、醫界ノ反響ヲ喚起シ其効果ニ關シテ或ハ水銀劑ヲ超越ストイヒ、或ハ之ニ劣ルトシテ論議セラレ、全然尙不定ノ時期ニ於テ余ハ數例ノ患者ニ就キ蒼鉛「ヂアスポラール」ノ微毒ニ對スル影響ヲ實驗セルヲ以テ茲ニ報告スベシ。

緒 論

一九〇九年エールリッヒ及秦ノ兩氏ガ「サルワルサン」ヲ創製シ、驅微療法ニ一大光明ヲ與ヘタルハ實ニ化學的療法ノ粹トシテ吾人ノ等シク推賞スル處ニシテ、現時其効果ニ就キテ疑義ヲ懷ク者ナシ。

然レドモ發明以來十有四年ヲ閱セル今日、空前ノ靈藥トシテ凡テノ微毒ニ其適用ヲ期待シ得ルヤ、長年ノ實驗ハ創製當時等シク驚嘆セル彼ノ効果ガ遺憾ナガラ過信ニシテ、ノミナラズ卓効ノ半面ニ怖ルベキ副作用、「サルワルサン」ノ耐性體質、或ハ耐砒素性「スピロヘータ」等ノ條件ニ由リ全ク効果ヲ現ハシ得ザル場合ノアルコトヲ承認セザルヲ得ズ。唯一二回ノ而モ不十分ナル藥量注射ニヨリ初期硬結ガ治癒シ、或ハ第二期症狀ノ消退セルヲ以テ微毒ノ全治ト輕信スルガ如キハ論ズルニ足ラザルモ假令正規ノ「サルワルサン」療法ヲ施スモ絕對的安心ノ得ラレザルコトアリ、之レ恐ラク靜脈内注射ニアリテハ腎臟ヨリノ排泄速ナルニヨリ又「サルワルサン」ノ腦脊髓液ニ移行セザルニ由ルナラント稱フル者アリ、勿論「サルワルサン」ノ動物體內ニ於ケル殺菌作用ハ他ノ藥劑ノ追及ヲ許サザルモ又如斯看過シ難キ缺

點ヲ有ス、之レ水銀劑ノ併用ヲ唱道セラレシ所以ナリ。

即チ水銀劑ハ「サルワルサン」ノ一過性治効ヲ補足スルモノニシテ歐洲ニ於ケル微毒流行ノ當初ヨリ其特効ヲ認メラレ、爾來今日ニ至ルモ其聲價ヲ損セズ直接間接ニ病原菌ニ對スル特異作用アルハ疑ヲ容レズ、就中不溶解性水銀劑ハ効力ニ於テ溶解性ノモノニ比シ勝リ且ツ持久性ニ反應シ「サルワルサン」補助藥トシテ推賞シ得ルモ、一方ニ於テ不快ナル副作用ヲ有ス。

カクテ、吾人ノ理想トシテハ不溶解性水銀劑ノ副作用ヲ除キ、其効力ニ於テ夫レ以上或ハ同等ノモノニシテ「サルワルサン」ト併用シ得テ、其一過性効力ト相俟ツテ持久作用アルモノヲ要求セントス。

斯ル趨勢ニ轉換セル輓近ノ時代ニ於テ突如トシテ、蒼鉛劑ノ微毒ニ著効アルヲ稱ヘラレ僅ニ二三年ニシテ實ニ三十餘種ノ製劑相次デ簇出スルニ至レリ、其効果ニ對スル批判ハ暫ク措キ之レ少クトモ驅微療法ノ一大進歩ト言フヲ得ベシ。

蒼鉛劑ノ歴史及種類

抑蒼鉛劑ハ十八世紀末ヨリ腸疾患ノ治療ニ用ヒラレタルモ驅微療法ニ應用セラレタルハ極メテ最近ニシテ、一九〇九年ニウーレンフート氏 *Dienhuth* ガ蒼鉛ト砒素トノ化合物ヲ「トリバノゾーマ」ニ用ヒ一九一九年ニコルレ、リッツ *Kolle*, *Ritz* ノ兩氏ガ膠樣酸化蒼鉛ヲ家兔微毒ニ試ミ一九二〇年ルワヂチー、サズラック *Levathi*, *Szenerie* 兩氏ガ「トリバノゾーマ」及家兔微毒ニ酒石酸「カリウムナトリウム」蒼鉛ヲ試用報告セシヨリ始メテ世人ノ注意ヲ喚起セリ。尙ル及サノ兩氏ハ一九二二年ヨリ二二年ニ涉リ種々ノ蒼鉛化合物ノ殺「スピロヘータ」作用ヲ家兔微毒ニ就テ比較實驗シ、毒性ノ少ク効果ノ多キヲ酒石酸「カリウムナトリウム」蒼鉛ナリトセリ、之ヲ臨牀的ニ人體ニ應用セルハフルニエー、及ゲノー *Fournier* u. *Guenot* 兩氏ニシテ其後佛國ノ醫家ガ競ツテ實地上ニ應用シ次デ獨乙、伊太利、亞米利加等ニ於テモ種々ノ製劑ヲ出スニ至リ現今ニテハ約二十三種ニ及ベリ、其内著明ナルハ佛蘭西ニテハ「トレポール」「ネオ

トレポール」「ムタノール」「キンビー」獨乙ニテハ「ビスモゲノール」「ミラノール」「ナデイサン」「ビザン」等ナリ。

蒼鉛ノ藥物學的作用

蒼鉛ハ重金屬ニシテ腐蝕作用ヲ有シ原形質毒ナリ、粘膜ヨリ硫化蒼鉛トシテ排泄セラレ燐、砒素屬ニ屬シ類脂肪殊ニ神經系及肝臓ト關係アリ、其重症中毒作用ノ特性ハ口内炎ト灰紫色ノ着色、腸炎及腐蝕作用、曲細尿管ノ潰滅ニ至ルマデノ腎臟障礙、皮膚ノ灰綠色ノ着色、神經系ニハ頭痛、眩暈、全身弛緩、視力障礙、痙攣、心臓及血管麻痺及呼吸中樞麻痺等ナリ、而シテ類似ノ性質ヲ有スル燐、砒素、「ワナディウム」、「アンチモン」ト等シク試験管内ニテ殺「スピロヘータ」作用アリ。

用量及副作用

蒼鉛劑ハ製劑ノ如何ニヨリ用法ヲ異ニシ筋肉内ニ或ハ靜脈内ニ用フ。從ツテ用量モ用法ニヨリ異リ筋肉内注射ニアリテハ學者ニヨリ説アルモシユロイス Schrens 氏ハ多數ノ製品ノ蒼鉛含有量ト用量トヲ對照シ一日ノ蒼鉛用量ガ〇・〇三瓦ナレバ効力確實ナリト言ヘリ、之ノ分量ヲ標準トシテ用量ヲ定メ之ヲ二乃三日ノ間歇ヲ以テ反覆注射シ十乃至十五回ヲ以テ一周治療トシ、一周治療後ハ一二ヶ月ノ間歇ヲ以テ第二周治療ヲ始ムルモノナリ。然レドモ靜脈内注射ハ筋肉内注射ニ比シ遙ニ少量ヲ用フ、ワロン氏ハ粘膜乳色斑ヲ治療セシムルニ「コロイド」蒼鉛ノ靜脈内注射ハ金屬蒼鉛ノ筋肉内注射ノ三分ノ一量ニテ足レリト言ヘリ。

副作用ハ水銀ニ類似シ多クハ注射部位ノ疼痛及炎症、輕度ノ體温上昇、齒齦ノ蒼鉛縁ト輕度ノ口腔炎、蛋白尿、胃腸障礙、輕度ノ神經症狀ナリト言フモ勿論體質、製劑ノ種類及用量等ニヨリ異ニスベシ。

實 驗 例

余ノ實驗ニ供シタル蒼鉛「チアスポラール」ハドレスデン市ノ藥品製造所ニ於テ、ドクトルクロッペル Klopfer 氏ノ製作セルモノニシテ、同市ノ皮膚科専門醫ノ紹介ヲ以テ吾ガ土肥教授ニ實驗ヲ依頼セラレタリ、現今佛國ニテ使用セラル、蒼鉛劑ノ多クハ不溶解性ニシテ主トシテ臀筋内ニ注射ス、然ルニ氏ハ約二年來苦心ノ結果漸ク不溶解性ノ水酸化蒼鉛ヲ膠質樣狀態トナシ透明ナル製劑ヲ作り得テ靜脈内注射ニ應用セシムルニ至レリ。保護膠質 Schützkojoid トシテハ無蛋白ノ含水炭素ヲ應用セリト。使用法ハ一週二回「アンブール」ヅ、靜脈内ニ注入ス。

而シテ余ハ土肥教授ノ命ニヨリ該藥ノ實驗ニ着手シ觀察ニ便ナル微毒疹ヲ有スル患者ヲ撰定シ其數僅ニ五例ニ過ギズ、且ツ尙長キ經過ヲ鑑察シ得ザルモ聊カ經驗セルヲ以テ報告セントス。

先ヅ體重八百七十瓦、九百四十瓦、千百瓦ノ三家兔ノ耳靜脈ニ本劑ノ○五瓦ヲ注入シ、一日ノ間隔ヲ以テ一○瓦ヲ注射シ著シキ毒性ノナキヲ確メタル後次ノ五例ニ就テ實驗セリ。

第一例。 稻垣某男、生後四ヶ月、大正十二年九月十七日初診。 診斷、先天微毒。

父ハ二十八歳ニシテ第二期潜伏微毒ヲ有シ、母ハ二十一歳ニシテ感染期ヲ知ラズ、二ヶ月前ヨリ頭髮脫落シ皮膚ニ發疹ヲ有セズ、ワ氏反應ハ強陽性ヲ呈セリ。

患兒ハ二ヶ月前ヨリ鼻加答兒アリ、約一ヶ月前ヨリ顔面ニ發疹ヲ生ジ發疹ハ殊ニ口圍、口脣、頤部ニ存シ其他下眼險、耳前部等ニ存在シ扁平ニ皮膚面ヨリ隆起シ環狀半環狀或ハ圓板狀ヲ爲ス、浸潤強ク銅赤色ヲ呈シ表面ノ上皮一部剝脫シ漿液ヲ漏シ稍灰白色ヲナシ殊ニ口脣部ニ於テハ扁平「コンデローム」狀ヲ呈ス、或ハ淺キ潰瘍ヲ形成セルモノアリ、概シテ環狀丘疹性微毒疹ノ性狀ヲ呈シワ氏反應ハ強陽性ナリ。

經 過。

蒼鉛「ヂアスポラール」ヲ最初〇ニヲ臂筋内ニ注射シ隔日ニ〇ニ五乃至〇ニ三ヲ注射セルニ、六回ニシテ發疹ハ著シク隆起ヲ減ジ或ハ吸收セラレテ少シク色素沈着ノミヲ認ムルモノアリ、副作用毫モナシ、其後患者ハ來院セズ、爲メニ經過並ニワ氏反應ニ對スル影響等不明ナリ。

第二例。 山森某男、二十三歳、材木商、大正十三年二月十日初診。 診斷、硬性下疳。

既往症。 生來健ナラザルモ著患ナク十七歳ノ時中耳炎ニ罹レル事アリ、淋疾ハ知ラザルモ二三年前左側横痃ヲ發シ切開ヲ受ケタルコトアリ。

現病歴。 本年一月六日及二月五日ニ不潔ノ交接アリ、二月八日陰莖繫帶部ニ、其後二三日ヲ經テ左側冠狀溝部ニ下疳ヲ生ゼリト、當時觸ルレバ少シク疼痛ヲ訴ヘ十二日頃ヨリ右鼠蹊腺無痛性腫脹ヲ來セリ。

現症。 身長五尺四寸、體格營養可良、皮膚尋常、口腔粘膜及頭部等ニ異狀ヲ認メズ、淋巴腺ハ肘腺頸腺等ヲ觸レザルモ右鼠蹊腺ハ拇指頭大ノモノ一個、小指頭大ノモノ一個ヲフレ壓痛ナシ、左鼠蹊部ニ約十糎長ノ癩痕アリ。局所ヲ見ルニ左側冠狀溝ニ一糎長、〇八糎幅ノ橢圓形淺キ表皮剝離面アリ、底部ハ浸潤可成強ク前縁ハ少シク隆起セリ、表面ハ赤色ヲ呈セルモ分泌物少ク稍乾燥ス、又繫帶部ノ左側冠狀溝ニ一致シテ〇五糎長、〇四糎幅ノ潰瘍アリテ底部ニ稍固キ浸潤アリ、漿液膿性ノ分泌物ヲ見ル。

經過。

二月二十一日、ワ氏反應ヲ檢セルニ陰性(十)。

二月二十五日、兩下疳ヨリ刺戟血清ヲ採取シ「スピロヘータ」ノ檢索ヲ試ミシモ陰性ニ終ル。

二月二十七日、再舉、ギームザ氏染色ニテ「スピロヘータ」ヲ證明ス。

二月二十八日、尿ハ黃色澄明、酸性、蛋白、糖ヲ證明セズ、「ヂアスポラール」〇五ヲ上膊靜脈内ニ注射ス、ワ氏反應強陽性ヲ呈ス。

三月一日、前回ノ注射ニ由ル副作用即チ頭痛、熱感、食思不振、嘔氣、全身倦怠、蛋白尿等ナシ、龜頭冠ノ冠狀溝ニアル硬結ハ注射前ニ比シ血性分泌物稍多シ、「ヂアスポラール」〇五靜脈内ニ注射ス。

三月五日、尿ハ黃色澄明、蛋白ナシ何等副作用ヲ見ズ、兩疳共ニ稍乾燥シ來ル他著變ヲ見ズ、「ヂアスポラール」一〇靜脈内注射。

三月八日、尿ハ澄明、蛋白ヲ見ズ、兩下疳共ニ全ク乾燥シ上皮形成ヲ營ム、龜頭冠狀溝ノ硬結ハ〇八糰長、〇五糰幅トナル、其他副作用ナシ、「ヂアスポラール」一四ヲ注射ス。

三月十二日、副作用蛋白尿ヲ見ズ、下疳ノ硬結同様、兩鎖骨下部ニ小豆大微赤色ノ自覺症ナキ小斑五六個發生ス、背部ニモ同様ナル皮疹三四個ヲ見ル、微毒性蕁麻疹ナリ、「ヂアスポラール」一〇注射ス。

三月十五日、副作用殊ニ蛋白尿ナシ、浸潤ハ多少吸收サレタル感アルモ著明ナラズ、「ロゼオラ」ハ前ニ比シ増加シ、右前胸部、右腋窩下部、左乳嘴上部、肩胛間部、兩肩胛骨體部上ニモ數個ヅ、散在ス、「ヂアスポラール」一〇注射ス。

三月十八日、副作用、蛋白尿ナク口内炎ヲ見ズ、胸背部ノ「ロゼオラ」益々著明トナリ側胸及背部一帯ニ數十個發生ス、陰莖ノ浸潤ハ縮少セルモ尙著明ニ存在ス、「ヂアスポラール」一二注射ス。

三月二十日、副作用ナク蛋白ヲ見ズ、「ロゼオラ」ハ多少不鮮明トナレルモノアリ、ワ氏反應ヲ檢セルニ尙強陽性ナリ。

第三例。室谷某男、二十四歲、看板業、大正十三年二月二十三日初診。 診斷、環狀丘疹性微毒、軟性下疳。

既往症。 生來健著患ナシ、一昨年八月淋疾ニ罹レル事アルモ陰部ニ下疳ヲ生ゼルコトナシ。

現病歴。 昨年十一月中旬不潔ノ交接アリテ龜頭冠ニ潰瘍ヲ生ゼルモ二週間程ニテ自然ニ輕快セリ、本年一月二日及十一日ニ再ビ感染ノ機會ヲ有ス、十六日ニ冠狀溝上部ノ包皮内板及繫帶部ニ各一個ノ潰瘍ヲ生ゼリ。

現症。體格榮養共ニ可良、便通二日ニ一行、咽喉ニ異常ヲ見ズ、胸腹部臟器ニ著變ナシ陰莖ヲ見ルニ龜頭冠ノ右側ニ於テ豌豆大ノ發疹ノ吸收サレタル褐色ノ色素沈著アリ、冠狀溝上部ノ包皮内板ニハ蠶豆大ノ潰瘍アリテ縁下蠶蝕シ豚脂様ノ苔ヲ附シ、膿性分泌盛ニシテ繫帶部ニモ豌豆大ノ潰瘍アリテタメニ繫帶ハ切斷サレ縁下蠶蝕シ同様ニ膿性分泌物ヲ見ル、觸ル、モ共ニ浸潤ナク左鼠蹊腺ハ鳩卵大ニ腫脹シ壓痛アルモ波動ナシ。

經過。二月二十三日、潰瘍部ニ「エリナコール」貼用横痃ニハブロー氏液冷濕布「アンチカロリン」靜脈内注射ヲ行フ。

二月二十六日、潰瘍面ハ壞疽ニ陥レル汚穢ナル組織片脫落後、良性ノ肉芽ヲ新生シ分泌物減シ横痃ハ壓痛腫脹ヲ減ズ。

二月廿八日、ワ氏反應強陽性ナリ、潰瘍ハ漸次周圍ヨリ上皮形成ヲ營ミ分泌益々減ズ、横痃モ腫脹去リ拇指頭大ノモノ二個ヲ殘スニ至リ右鼠蹊腺ハ小指頭大ノモノ一個ヲフル、肘腺ハ左ニ小豆大ノモノ一個頸腺ハ兩側共ニ爪甲大ノモノ二個ヲフレ何レモ硬シ。

三月三日、潰瘍面ハ益々乾燥シ大部分癬痕ヲ形成ス、陰囊ヲ見ルニ前面ヨリ兩側面ニ於テ豌豆大乃至爪甲大ノ表面扁平ナル發疹散在シ右側ニ十二三個、左側ニ十個内外アリテ環狀ヲ呈セルモノアリ、後側面ノ大腿ト接觸スル部ニ生ゼル二三ニアリテハ中央少シク陷凹シ濕潤シテ色稍紅色ヲ帶ブルモ其他ノモノハ乾燥シ光澤アリテ周圍ノ皮膚ヨリ色素少ク何レモ僅ニ浸潤ヲ有ス、自覺症ナシ、發生時日ヲ尋ネルモ不明ナリ恐ラク四五日前ヨリナラント訴フ、發疹ノ狀態及ワ氏反應ノ陽性ノ點ヨリ環狀丘疹性微毒ト診斷シ尿中蛋白ナキヲ確メ「チアスポール」〇・五ヲ注射ス。

三月五日、尿ハ澄明蛋白糖ヲ證明セズ、又頭痛、熱感、食思不振等ノ副作用ナシ、「チアスポール」一〇注射ス。
三月八日、前回注射當日頭痛アリ食思尋常、熱感ナシ蛋白ヲ證明セズ、丘疹ハ多クハ一層扁平トナリ濕潤セルモ

ノニアリテハ乾燥ス、下疳ハ全ク癩痕ヲ以テ治セルモ淋巴腺ハ無痛性硬固ニ依然トシテ存ス、又身體ノ他部ニ何等皮疹及變化等ヲ認メズ、「チアスポラー」一〇注射ス。

三月十七日、副作用ナク蛋白ヲ見ズ、發疹ハ全部吸收セラレ痕ニ褐色ノ色素沈着ヲ殘セルモノアリ、「チアスポラー」一五注射ス。

三月二十日、副作用ヲ見ズ、ワ氏反應ヲ檢セルニ尙強陽性ヲ呈ス。

第四例。辻野某男、十九歳、洗濯業、大正十三年三月六日初診。

診斷。落屑性丘疹性微毒、微毒性脫毛症、扁平「コンヂローム」、急性腺窩性扁桃腺炎。

既往症。生來健著患ナシ、十六歳ノ時淋疾ヲ經過セルモ曾テ陰部ニ疳瘡ノ發生ヲ知ラズ。

現病歴。昨年九月感染ノ機會アリテ其後二十日ヲ經テ陰莖ニ發疹ヲ生ジ自然ニ治癒セリト、然ルニ本年一月頃ヨリ頭髮脫落シ間モナク頂部、背部、腰部、前膊等ニ自覺症ナキ皮疹ヲ發生シ二月下旬ヨリ聲音ノ嘶嘎ヲ來セリ、二三日來頭痛、咽頭ニ嚙下痛ヲ訴フ。

現症。體格榮養共ニ可良、皮膚稍蒼白、淋巴腺ハ兩頸腺、小指頭大ニ觸レ肘腺ハ左側ニ小豆大ノモノ一個、鼠蹊腺ハ小指頭大ノモノ三個ヲ觸レ何レモ硬シ、咽頭ヲ見ルニ前口蓋弓ニ於テ境界明劃ニ粘膜潮紅腫脹シ特ニ扁桃腺ハ兩側梅實大ニ腫脹シ表面ハ凹凸不平米粒大ノ膿點數個散在シ嚙下痛アリ、聲音ハ嘶嘎シ殆ド發聲シ得ズ、頭髮ハ後頭部、兩顛顛部ニ於テ脫落シ一般ニ菲薄トナリ其中ニ十錢銀貨大ノ脫毛部混在ス、之ノ脫毛部ニ一致シテ表面扁平銅赤色大豆大ノ丘疹數個發生セルヲ見ル、便通ハ三日ニ一行、胸腹部臟器ニ著變ヲ見ズ、體温三六・五「ブルス」七十ヲ算ス、皮膚ヲ見ルニ側胸上部、項部、脊部、腰部、肘部屈伸兩側面等ニ相對性ニ銅赤色ノ發疹散在シ、殊ニ腰部ニ於テハ發疹密生シ一部癒合シテ地圖狀ヲ呈ス、各發疹ハ大サ米粒大ヨリ蠶豆大ノ丘疹ニシテ、表面ハ扁平著明ノ浸潤ヲ有シ、何等自覺症ナク其ノ或モノハ白色ノ糝糠ヲ有ス。陰莖ヲ檢スルニ發疹及癩痕等ヲ

證明セズ、肛圍ニハ豌豆大ノ浸潤アル丘疹數個癒合シ濕潤シ表面汚穢灰白色ヲ呈ス。

經 過。

三月六日、ワ氏反應ヲ見ルニ強陽性ヲ呈ス、蛋白試験ヲ「ズルフォサリチール」酸ニテ行ヘルニ微ニ混濁ヲ呈ス、硝酸銀水塗咽、含嗽劑ヲ與フ、「チアスポラール」〇・五靜脈内ニ注射ス。

三月八日、咽頭痛増劇ス、體温三八・〇「プルス」九十六ヲ算シ扁桃腺ハ著シク腫脹ヲ増シ膿點増加シ恰モ覆盆子狀ヲ呈ス、頭痛アリ、尿ハ褐色ニ混濁シ蛋白ヲ多量ニ證明セルモ浮腫ナク腎部壓痛及尿量減少等ナシ、安靜ヲ命ジ含嗽劑ヲ投與シ頸部濕濕布、硝酸銀水塗咽ヲ行ヒ食餌ニ注意セシム。

三月十一日、扁桃腺腫脹及疼痛大ニ減ズ、熱候ハ三六・五ニ降下シ聲音モ恢復シ來リ僅ニ發聲シ得ルニ至ル、浮腫ナク蛋白モ減ズ。

三月十三日、咽頭ノ腫脹、潮紅去ル扁桃腺ノ膿點ヲ見ズ、蛋白ハ微量ニシテ對照試験ニテ白濁ヲ認め得ルノミ、丘疹ハ乾燥シ紅色ノ度減ズ、「チアスポラール」一〇ヲ注射ス。

三月十五日、何等副作用ヲ見ズ、食思可良トナリ尿ハ黃色澄明、蛋白ナシ、發疹ハ落屑ヲ蒙ルモノ多ク炎症々狀減ジ褐色ヲ呈シ一層扁平トナリ浸潤明カニ減ゼルモ脫毛部ニ變ナシ。

三月十六日、副作用ナク尿中蛋白ヲ見ズ、「チアスポラール」一〇注射ス。

三月十八日、副作用ヲ認めズ、蛋白ナシ、發疹ハ益々乾燥シ褐色ノ色素沈着ヲ以テ吸收セルモノアリ、尙存セルモノモ落屑盛ニシテ浸潤吸收セラレ多クハ皮膚面ト同高トナル、肛圍ノ「コンヂローム」モ乾燥シ來ル脫毛部依然トシテ變化ヲ見ズ。

三月十九日、副作用ナク尿中蛋白ヲ見ズ。

三月二十日、「チアスポラール」一〇ニ注射ス。

三月二十二日、何等副作用ヲ見ズ、蛋白ナシ、肘部、腰部ニ數個ノ落屑ヲ有スル發疹ヲ殘スノミニテ他ハ全ク吸收セラル。

第五例。安田某男、二十六歳、農、大正十三年三月四日初診。

診 斷。混合性下疳、右側下疳性横痃。

既往症。生來健ナルモ五六年前癩癧ニ罹リ數回ノ「レントゲン」放射ニヨリ治セリト、淋疾ノ既往ナキモ八年前不潔ノ交接後陰莖ニ潰瘍ヲ生ジ約半歳ヲ要シ自家療法ニテ治セリト。

現病歴。大正十三年二月二日、感染機會アリ、六日陰莖ニ發疹ヲ生ジ漸次潰瘍ヲ形成シ當時疼痛アリシガ目下自發痛ナシ、二月中旬ヨリ右鼠蹊腺腫脹シ來リ疼痛アリ。

現 症。體格榮養良ナラズ、皮膚蒼白、咽頭口腔粘膜ニ變ナシ、又胸腹部臟器ニ異常ヲ認メズ、右側頸腺小豆大ニ觸レ肘脈ハ左ニ小豆大ノモノ一個、鼠蹊腺ハ左ニ豌豆大ノモノ二個ヲフル、右鼠蹊腺ハ小兒手掌大ニ腫脹シ皮膚潮紅シ中央ニ波動ヲフレ壓痛アリ、陰莖ヲ見ルニ左側冠狀溝ニ一・二浬長、○・八浬幅ノ橢圓形ノ潰瘍アリ、潰瘍ハ稍深キモ縁下蠶蝕セズ、底部ニ黃色豚脂様ノ苔ヲ附シ膿様血性ノ分泌盛ナリ、之ヲ指間ニ挾メバ底部ニ著明ノ稍固キ浸潤ヲ觸ル、其他頭髮視力音聲ニ異常ナク皮膚疹ヲ認メズ、又肛圍陰囊ニ變化ヲ見ズ。

經 過。

三月六日、ワ氏反應ヲ見ルニ強陽性ヲ呈ス、尿中蛋白ヲ證明セズ、潰瘍面ハ純石炭酸ヲ以テ腐蝕シ「ペルボラツクス」軟膏貼用、横痃ニ溫濕布ヲ施ス。

三月八日、「デアスポラール」○五ヲ靜脈内ニ注射ス、横痃ノ波動益々著明トナル。

三月十日、前回注射當日夕景ヨリ熱感頭痛アリシモ臥寢時頃ニハ緩解ス、且ツ夜間盜汗アリシトイフ、尿中蛋白ヲ見ズ、潰瘍ハ尙漿液膿性ノ分泌盛ナリ、「デアスポラール」一○注射ス。

三月十二日、食思尋常、熱感ナシ蛋白ヲ證明セズ、入院ヲ命ジ横痃ノ手術ヲ行フ。

三月十五日、朝時體温三六・二「ヂアスポラール」ニ正午靜脈内ニ注入ス、午後四時檢温セルニ三六・七同六時三
七・二同八時三六・七同十時三六・六少シク頭痛アルモ食思尋常嘔氣ナシ、午後五時檢尿ノ際蛋白ヲ認メズ。

三月十六日、潰瘍ハ分泌物減ジ邊緣少シク上皮形成ヲ始メルモ浸潤ハ依然トシテ同様ナリ、尿中蛋白ヲ見ズ、體
温朝時三六・四午後三六・六。

三月十九日、「ヂアスポラール」ニ午後二時注射ス、分泌大イニ減少ス、潰瘍面ハ縮少セルモ浸潤ハ僅ニ減ゼル
ノ感アルノミ、注射時ノ體温ハ三六・三午後四時三六・七同六時三七・〇同八時三七・一同十時三六・七ナリ、輕度ノ
頭痛及不眠アリ。

三月二十日、食思變ナシ、潰瘍ノ分泌ハ一層減ズ、肉芽可良ニシテ潰瘍面ハ半減スルモ〇・八糰長、〇・六糰幅ノ浸
潤ヲ殘ス、蛋白ヲ證明セズ。ワ氏反應ヲ再檢セルニ尙強陽性ヲ呈ス。

三月二十二日、潰瘍面ハ殆ド薄キ癩痕ヲ以テ治セリ、身心ノ違和ナク蛋白ヲ見ズ、浸潤ハ依然トシテ同様ノ状態
ニアリ。

概 括

前述セル如ク、注射法ハ一週二回ノ間歇ヲ以テ第一例外ハ前膊ノ靜脈ヲ撰定シ局所ヲ消毒シ極メテ徐々ニ血管内
ニ注入セリ、注射器ハ藥液ヲ吸入スル前先ヅ以テ殺菌蒸餾水ヲ以テ洗滌シ液ノ混濁ヲ豫防セリ、而シテ余ハ以上ノ症
例ニ就キ本劑ノ微毒ニ對スル反應如何ヲ觀察センタメ本劑以外ノ「スピロヘータ」ニ影響スベキ藥劑ノ内外的使用ヲ避
ケ又副作用殊ニ蛋白尿及口内炎ノ偶發症ニ就テハ終始注意セリ。

以上五例ニ於テ其經過ヲ總括スレバ第一例ニアリテハ總量約一・五坵ノ注射ニヨリ第三例ニアリテハ總量三七坵ノ

注射ニヨリテ微毒疹ハ吸收セラレ奏効著明ナルモ他ノ症例ニアリテハ効果顯著ナラズ、殊ニ第二例ノ硬性下疳ニアリテハ注射療法ノ經過中ニ蓄薇疹ノ發生ヲ見タリ。

副作用ハ唯一例ニ於テ注射後六時間ヲ經テ五六分ノ體温上昇及頭痛ヲ訴ヘタルモノアレドモ間モナク平温ニ復シ口内炎、腎臟刺戟症狀ニ就キテハ全症例ニ於テ何等惹起セルヲ見ズ。

ワ氏反應ニ對スル影響ハ十分ナル注射回数ヲ重ネザル故之ヲ論ズルハ極メテ無謀ナルモ少クトモ五乃至七回ノ注射ニアリテハ何等ノ影響ヲ與ヘズ(總會期日切迫セル爲メ早急ニ検査セリ)。

結 論

實驗セル症例ハ僅ニ五例ニシテ且ツ注射回数モ四乃至七回ニ過ギズ、故ニ本劑ノ効力ニ就テ批判シ評價シ得ザルハ勿論ナリト雖モ以上實驗セル成績ニ由レバ蒼鉛「ヂアスポラール」ハ微毒ニ對シ効果アルモ其程度タルヤ「サルワルサン」ニ比較スベクモナク、水銀劑ニ比スルモ尙効力稍劣レルモノ、如ク思考セラル。

副作用トシテハ軽度ノ頭痛、五六分ノ體温昇騰ヲ來スコトアルモ少時ニシテ消散ス。

尙詳細ニ關シテハ多數ノ實驗ヲ經タル後ニ讓ル事トスベシ。

擱筆スルニ臨ミ土肥先生ノ終始御懇篤ナル御指導ヲ深謝ス。(本編ハ新潟醫科大學ニ於テ開會セル日本皮膚科學會總會ノ席上ニテ報告セルモノナリ)